

令和 6(2024)年度 過年度卒業生対象アンケート集計結果

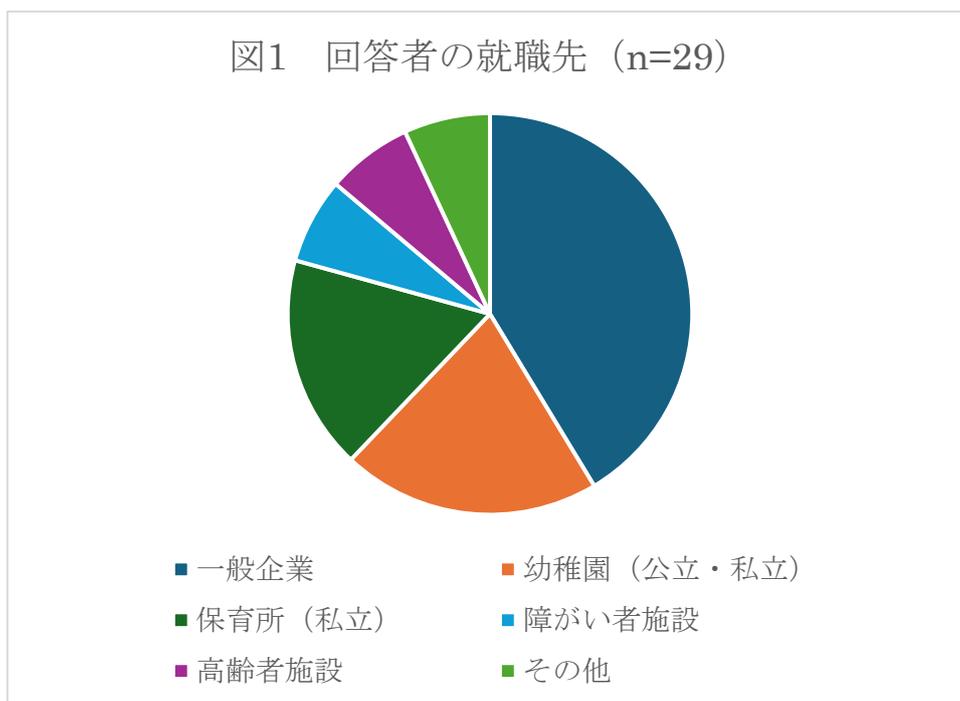
目的：社会人となった卒業生が本学在学中に身につけた学士力を、どのように認識しているかを明らかにする。

方法：こども心理学部およびモチベーション行動科学部が掲げる学士力の中から 16 項目を選定し、5 段階で評定する質問フォームを作成した。同窓会のメーリングリストから卒業後 2 年目の同窓生を対象として回答を求めた。調査時期は令和 7 (2025) 年 2 月～3 月。29 名（こども保育・教育専攻 14 名、心理専攻 7 名、モチベーション行動科学部 8 名）の回答が得られた。

結果および考察：

1. 回答者の就職先の内訳を図 1 に示す。こども心理学部こども保育・教育専攻卒業生は幼稚園、保育所、障がい者施設など資格や免許を生かして就職している。一般企業に就職したのはこども心理学部心理専攻およびモチベーション行動科学部卒業生である。その他は学童保育所、自営業であった。

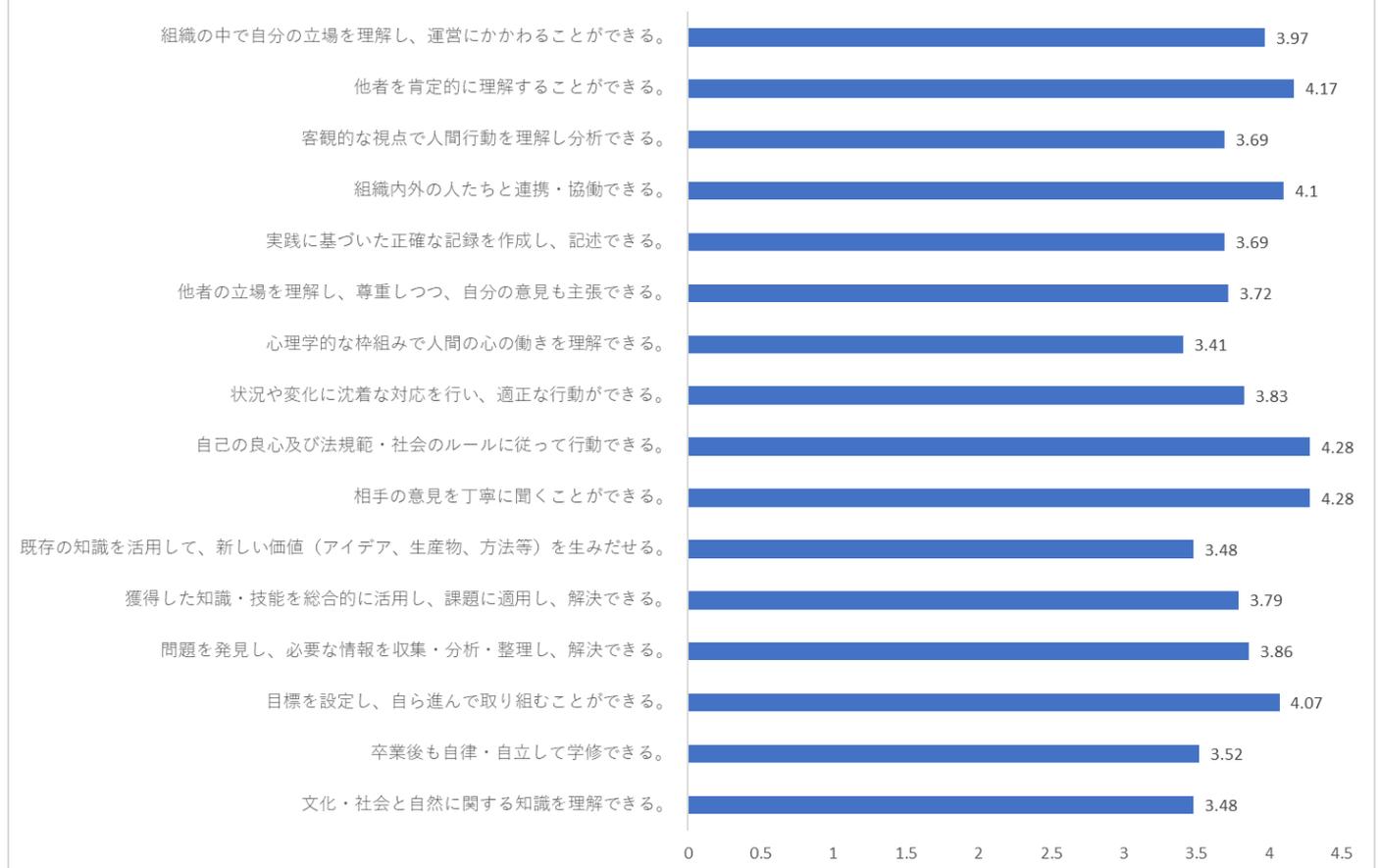
図1 回答者の就職先 (n=29)



2. 卒業生の自己評定の結果を図2に示す。自己評定の平均値は全て3を上回っていたので、卒業生は学士力がおおむね身につけていると考えている。最も高かった項目は「自己の良心及び法規範・社会のルールに従って行動できる。」「相手の意見を丁寧に聞くことができる。」であり、次いで高かったのは「他者を肯定的に理解することができる。」であった。良心に照らして行動することやコンプライアンスは現代社会においてなくてはならない事柄なので、本学卒業生がこの項目を高く評価できていることは好ましい。

相手の意見を丁寧に聞くことや、他者を肯定的に理解することは仕事において人を尊重し人間関係を良好に保つために役立つ力である。これらが自分の身につけていて発揮できているという評価なので、こども心理学部もモチベーション行動科学部ベースとなる心理学の知識や技能が活かされている結果と言えるであろう。

図2 卒業生の自己評定 各項目の平均値（卒後2年 全学部学科）



3. 令和6年度の調査より、就職先（企業）と卒業生の質問項目は同じものとしたため、項目別の評定平均値を卒業生と就職先（企業）とで比較してみると、ほぼ類似した結果となった。多くの質問項目で就職先（企業）の方が卒業生よりも高めの評定値であり、本学卒業生が好意的に受け入れられていることがうかがえる。

逆に就職先（企業）が卒業生よりも低い評価をした項目は「目標を設定し、自ら進んで取り組むことができる。」であり、就職先（企業）も卒業生も低めの評価をした項目は「既存の知識を活用して、新しい価値（アイデア、生産物、方法等）を生みだせる。」であった。今後は本学での教育において、仕事への積極性や創造性などを伸ばす取り組みが必要と考えられる。

図3 項目別評定平均値の比較 卒業生自身と就職先（企業）

